

日本社会心理学会会報

233号



発行 日本社会心理学会 <http://www.socialpsychology.jp/>
編集・制作 広報委員会 (担当常任理事: 内田由紀子)

2024年6月28日

日本社会心理学会第65回大会へのお誘い

岡 隆

日本社会心理学会第65回大会は、8月31日(土)と9月1日(日)の2日間で日本大学文理学部(東京都世田谷区)にて開催されます。いよいよ2か月半後に迫ってきました。日本大学文理学部は、最近では2019年度に日本教育心理学会第61回総会、2022年度には日本心理学会第86回大会を開催しましたので、ご存じの会員のみなさんも多いと思います。また、ずいぶん以前になりますが、1987年度には本学会第28回大会を開催しました。懐かしいと思われる方もいらっしゃると思います。文理学部キャンパスは新宿や渋谷から電車で10分ほど、駅から徒歩10分ほどです。ときどき特急電車に乗られて戻ってこられる方がいらっしゃいますので、ご注意ください。また、日本大学の16の学部は関東一円にそれぞれのキャンパスを持っています。地図アプリ等をご利用の際は、「日本大学文理学部」または「文理学部」で検索されるようお願いいたします。

第65回大会は、オンサイト対面開催として準備を進めています。上智大学での第64回大会は、新型コロナウイルス感染症の5類への移行が不確かななかでのご準備となり、対面形式とオンライン形式を併用したハイブリッドで開催されました。それぞれの形式のメリットを生かし、それらが融合したすばらしい大会でした。新型コロナウイルス感染症は昨年5月に5類に移行しましたが、第65回大会もダイバーシティという観点からもこれを継続していきたいところです。しかしその一方で、インタラクションという観点からオンサイトの比重を高めていくにあたり、ダイバーシティに係るコストとインタラクションに係るコストの兼ね合いが難しくなっています。第65回大会は、コロナ禍以前がそうであったように、感染症の不安がないなかでの会員相互のオンサイト・インタラクションに踏み切りたいと思います。その会場として3号館という建物の1階(ポスター発表198件)と3階(口頭発表80件、シンポジウム1件、ワークショップ2件、学会活動委員会企画1件)にすべてを集中させました。暑い盛りですし、台風も懸念されますが、いったん会場に入れば、すべて会場内で完結するようにしたいと思います。1日目は総会でお昼の軽食を提供させていただき、2日目も広い教室でお昼の軽食を提供させていただきます。軽い食事をとりながらの話に花を咲かせていただきたいと思います。

日本大学文理学部で会員のみなさんとリアルにお会いできますよう、そして本大会がみなさんの有意義なインタラクションの機会となりますよう、心待ちにしています。

(おかたかし・日本大学・第65回大会準備委員長)

大会 Web サイト : <https://www.socialpsychology.jp/conf2024/>



新宿を望む



キャンパス全景



1987年第28回大会
現在も残る1号館



2024年第65回大会 新本館

第11回春の方法論セミナー報告・参加記

第11回春の方法論セミナーは、「和文誌の未来を切り拓く:査読プロセスの最適化と論文執筆の知恵」と題して2024年2月29日(木)に対面(大正大学10号館)+zoom中継のハイブリッド方式で開催されました。ご参加くださった方の中から参加記の執筆をお願いいたしました。



対面会場写真

セミナーWeb サイト：<https://sites.google.com/view/jssp2023nendoseminar/home>

参加記1

武田 美亜

論文査読の詳細なステップやそこに関わる方々の役割をまともに知ったのはいつ頃だったろうか。諸先輩方から漏れ聞いたいくつかの話や自分が受けた査読の経験を頼りに手探りでやってみて、あからさまに叱られたりはしていないからたぶんこの方法でダメではないのだろう、と思いながら、投稿論文を読ませていただいていた。

三部構成であった本セミナーの第一部は、まさにそうした不安に答えてくれると期待させる「論文査読セミナー」と題したものであった。大坪先生の話提供では『社会心理学研究』の査読スタイルだけでなく海外誌の査読スタイルや、それらを比較した上での社心研投稿のメリットが説明された。平井先生の話提供では、FINER や PICO/PECO といった枠組みを利用することで、査読者がどこを見ればよいのか明確になる(査読者間のブレが減る)可能性を示された。

第二部では、中島先生と三浦先生が、ご自身の経験から、論文の書き方・書かせ方に関する tips を惜しみなく提供して下さった。考えてみれば、査読に限らず論文の書き方や書かせ方(指導のしかた)も、多くは自分が受けた指導の真似や試行錯誤でどうにか形成してきたものであった。今回お話いただいた tips の中には、自分もやっているものもあれば、私にとって目新しいものもあった。後者が大きな収穫であったことはもちろん、前者についても、経験的に実践してきたことを言語化していただけたようでありがたかった。

査読する側、される(論文を書く・書かせる)側の話ときて、第三部、現編集委員長である結城先生の“ライブセッション”は、実は本セミナーのクライマックスであった(かもしれない)。『社会心理学研究』がいま陥っているのっぴきならない状況を具体的に聞いてしょんぼりした後、そんな事態を打破すべく行われている改革や、その結果として上々の結果が出つつあることも紹介され、そんなドラマチック(?)な展開に、ままと「そうだ研究をして論文を書いて社心研に投稿しよう!エンカレッジするような査読をして、みんなで社会心理学を盛り上げよう!」という気持ちになった。

本セミナーで印象的だったのは、提供される情報の有用性もさることながら、Slido への書き込みで、様々な状況に置かれた

研究者（もちろん院生も含む）の方々の切実な事情が多く綴られていたことだ。特に論文指導・執筆等について、理想的にはそうしたいが到底そうできる状況でない、といったような書き込みがいくつか見られた。これに関しては個人のスキルだけで解決しきれないところもあるだろうが、そういった事情を吐き出し相談できる場があるだけでも違うよね、という中島先生のコメントは1つの救いであったと思う。研究やその周辺の話を楽しんでできる「誰か」の存在は重要なのだと、改めて感じた。最後になりましたが、本セミナーを企画・運営くださった先生方、登壇者の先生方に感謝申し上げます。

（たけだ みあ・青山学院大学）

参加記2

長部 恵美

今回の春の方法論セミナーを受講させていただきました。今回の方法論セミナーは「方法論」というよりも、「社会心理学研究の編集の実態と、論文投稿のポイント」が企画趣旨であったと思います。先生方はご著名な先生方が登壇され、参加して本当に良かったと感じています。先生方のお話は、無学の私にとっても興味深く、わかりやすいものでした。

まず、大坪先生の「『社会心理学研究』の編集プロセスについて」から始まり、社会心理学研究の編集プロセスと投稿するメリットが明確に提示されました。特に、査読者の査読の権限が増したこと、査読期間を短くすべく努力されていることについて、解説されていた点が印象的でした。これまで私は論文投稿に関して荷が重い、先が見えないものと思っておりましたが、社会心理学会の先生方は投稿論文に積極的に迅速に対応することが伝わってきました。

続く平井先生には、「社会心理学研究における査読プロセスの最適化の方法」をお話いただきました。査読者の立場として、主にリサーチ・クエスチョンや研究デザインの具体性の検証、妥当性要求水準についてお話をいただきました。私自身、日々の研究の中で、リサーチ・クエスチョンや研究デザインを十分に見直してきたか、また論文にするにあたって妥当性要求水準と合致するかを、査読者の先生の視点を参考にしてお見直し機会をいただいたように思います。

次に中島先生のお話では、「論文を書くときに、何を大切にしてきたか——院生が論文を書き進めていくために、いつ、どのような声掛けをしてきたか」という題目で、指導教員の先生が学生の研究、論文作成に対してどのような道筋を示してこられたかをお聞きすることができました。また、その際に社会心理学研究の査読方針を活かした論文の書き方もお話しくださり、その実施の手順などを詳細にご説明いただきました。まだ学生の私にとっては、他大学の先生のご指導方法を聴ける、非常にためになったお話でした。

次に、三浦先生から「論文の書き方・「書かせ」方——失敗を含む経験談」の題目でお話いただきました。三浦先生が「どうして論文を書いてこなかったか」という過去の実体験から、論文を書くようになったこと、書き続けていることまでお話しいただきました。私自身、現在、論文作成がうまく進んでいない状況なのですが、三浦先生の力強いお話に背中を押された思いです。

最後に結城先生から「『社会心理学研究』の取り組み」をお話いただきました。驚いたことに、社会心理学研究の投稿数・採択率が顕著に低下している状況が報告されました。このままでは学会が潰れる懸念も考えられるという状況だそうです。その中で、学会誌の改革を始めているとのこと。査読方針を減点主義から加点主義に変更し、デスクリジェクションされずに、出版可能性のある論文に対しては、出版可能になるようサポートするよう変更されたそうです。セミナー当日に会場では、出席者に2023年6月1日発行の「査読方針についてのお願い」が配布され、学会の本気度が伝わってきました。私自身、最近、論文が受理されたのですが、査読では加点主義で対応いただき、不足部分をご指摘いただきました。そのご指摘に対応するよう修正をかけることによって、論文が受理されるように導かれた形になりました。

今回のセミナーで学んだことを活かし、社会心理学研究への投稿を恐れずに、研究を論文の形にしていきたいと思いました。最後に、今回のセミナーを企画・運営して下さった先生方、貴重な話題を提供して下さった先生方に、深く感謝いたします。ありがとうございました。

(おさベ えみ・新潟大学)

大坊郁夫先生・瑞宝中綬章受章

本学会名誉会員の大坊郁夫先生が、令和6年春の叙勲（2024年4月29日発令）で瑞宝中綬章を受章されました。瑞宝章は、公務等に長年にわたり従事し、功績を挙げた方に対して授与されるものです。大坊先生のこれまでの研究、御活動の業績が高く評価されたものです。大坊先生、おめでとうございます。

受賞コメント

大坊 郁夫

受章したことについて、このようにメッセージを書かせていただくことに光栄であるとともに面映ゆきを感じております。瑞宝章は「長年公務等に従事した者」へのものです。2024年3月に北星学園大学を退職するまで、大学の教員として51年間勤務しました。

数えてみると、最初の就職先の札幌医大以降、山形大学、北星学園大学、大阪大学、東京未来大学、北星学園大学と長い年月でした。大学の教員生活で一番に思い出すのは、学生と過ごしたゼミ、卒論、修論、博論さらに学会誌への論文投稿にかかわっての濃密な時間です。その際に、このようなアドバイスでよかったのだろうか、他の教員ならもっと適切なアドバイスをするのではないかとよく思ったものです。時間が経ってみると、それぞれが、大学や大学院での経験から大きく飛躍して活躍していることを知るほど幸せなことはありません。特に、長く携わってきた、1.親密な対人関係の展開過程、2.小集団場面での言語的・非言語的コミュニケーション過程、3.社会的スキルのトレーニングなどは、全ての社会活動の基礎でありながら、そう多くは研究されていない分野（特に2、3）であり、もっと進展して欲しいと願っています。



研究者にとって、学会活動は不可欠な相互鍛錬の場だと考えています。研究成果を仲間と共有し、批判し合い、新たな示唆を受けられるからです。基本は、面と向かって発表・議論することだと思います（懇親会での交流も大事）。その学会活動にも長く関わって来られたのも私にとって幸せなことでした。今でこそ、若い人々が集い合い、忌憚なく活動できています（と思っています）が、これまでの歴史を振り返るとそう言い切れない時期もありました。また、財政的にもかなり切り詰めた活動しかできないこともありました。当時の役員の工夫は容易にはここで書き切れないものがあります。

大学の教員は、研究だけではなく、教育の工夫、組織運営での役割（学内の各種委員など）も重要です。大方は、できるだけ避けたいと願いがちでしょうが、組織が健全に保たれているからこそ、教育も研究もできるのです。このことについては、会報をお読みのある年齢以上の方にとっては尤もと思われるでしょう。未だそう思えないでいる大学院生、大学教員の方々へ、そこまで含めた中で研究することをイメージしてください。長く大学に勤めた者としての願いです。

最後に、私自身や学生に活動の機会をいただいた日本社会心理学会にこれまでのお礼を申し上げますとともに、さらなる充実・発展を祈念いたします。

(だいぼう いくお・大阪大学、東京未来大学、北星学園大学名誉教授)

清水佑輔氏「第14回日本学術振興会育志賞」受賞

受賞コメント

清水 佑輔

昨年度、本学会のご推薦を頂き、第14回日本学術振興会育志賞 (<https://www.jsps.go.jp/j-ikushi-prize/>) を受賞することができました。自分の実力を遥かに上回る賞を頂くこととなり、身に余る光栄に存じます。本稿では、育志賞への本学会のご推薦を今後受ける方々にとって、少しでも参考になることを願い、受賞に至るまでの経緯を述べさせていただきます。また、日頃お世話になっている方々に、この場を借りて感謝を伝えさせて頂ければと思います。

<受賞に至るまでの経緯>

今回の受賞の対象となった研究は、私が修士課程1年の頃から関心を寄せてきた「高齢者に対する態度」に関するものでした。ところで、本稿をお読みの方は、学部生から大ベテランの先生まで様々だと思います。性別も価値観も様々です。しかし、全ての人間に共通する点として「死亡しない限り、必ずいつか高齢者になる(あるいは既になっている)」というものがあります。この忘れられがちな事実を目を向けさせることで、若者にとって外集団であった高齢者に対する態度が、少しでもポジティブにならないだろうか、というのが本研究の着眼点です。

本学会から育志賞に推薦して頂くにあたり、自身のこれまでの研究や、今後の展望に関する書類を提出する必要がありました。その際、どの部分が自身の研究の強みであり、推しポイントであるのかについて整理することが非常に難しかったです。指導教官の唐沢かおり先生から、申請書に対して「言いたいこと・良さが全く伝わらない」というコメントを数多く頂戴したことを覚えています。



書類選考が終わると、次は面接選考に招待して頂きました。書類選考通過の通知から面接までの期間が短く、非常に焦りました。なかでも、面接選考用に自身の研究をまとめたスライドなどを提出する必要があり、そのスライドに盛り込む内容の選定にはとても苦労しました。余談ですが、ある方に頂いた「審査者の中に高齢の先生もいるかもよ」という言葉は、非常に有意義かつ刺さるものがありました。面接選考当日のことは正直ほとんど覚えていないのですが、あっという間に時間が過ぎていきました。これまで多くの先生方に、学会大会やゼミの場で鍛えて頂いたお陰で、全ての質問に対して、一応、何かしら返答できたと思っています。いや、そう思っているだけかもしれませんが…。

<感謝の言葉と今後の抱負>

育志賞を頂くにあたり、まず、本学会会長の西田公昭先生のご推薦に、心より感謝申し上げます。また、本学会担当理事の西村太志先生は、育志賞に関する諸々の手続きだけでなく、多くの応援のお言葉を頂きました。お二方には、学会大会や懇親会といった場でお声がけ頂くこともあり、非常に心強い支えとなったことを覚えています。その他、関係者の先生方のご尽力、および学会大会や研究会において多くのコメントを頂いた先生方に、深く感謝申し上げます。

私が大学院に入学する前からいつも温かく厳しくご指導頂いている唐沢先生と、研究室の先輩である橋本剛明先生(東洋大学)は、快く推薦書を書いて下さりました。唐沢先生には、私が博士課程1年次であったとき、とある飲み会の帰り道に、「来年度の育志賞に出してみないか」とお声がけ頂きました。当時は雲の上のものだと思っていた育志賞を意識させ、自分の研究への熱意やスピード感を大きく高めて下さったことに深く感謝しています。また、申請書を作成する際に悩んでいた自分に対

し、学生室で直接(叱咤)激励頂いたことにも心より感謝申し上げます。

また自分は、日々刺激を与えてくれる研究室の仲間にも本当に恵まれたと思っています。極寒の早朝でも、「もう今日は研究を止めよう」と思う時間帯でも、血眼でPCと向き合っている彼らの姿を身近に見て、いつも刺激をもらっています。彼らはストイックすぎるあまり、その体調面は心配になることもあります。これからも互いに愚痴を言い合いながら、高め合っていきたいと思っています。もし、研究室における彼らとの懇談がなかったら、本賞の受賞は絶対になかったと確信しています。

本年度、育志賞を受賞した18名の研究テーマが、上記のサイトで公開されています。どれも高度で、いずれも目を引く最先端のものばかりです。一方で、自分を含め社会心理学が扱うテーマは、一般の人々にも分かりやすいものであると感じています。それゆえ、時には学术界で軽んじられてしまうこともあると思いますが、自分は逆に、それが社会心理学の強みだと考えています。一般の人々が日々言語化している(あるいは言語化できないが経験している)認知、感情、行動をいかに精緻に扱うか、その格闘に面白さがあると思っています。具体的には、人々が日常的に感じる「高齢者のことが好き・嫌い」という態度や、関連する心理変数について、まだまだ社会心理学が解き明かすべきものは多く存在するはずです。今後も先生方から多くのことを学び、知見を社会に還元できる研究者を目指して参ります。一層精進して参りますので、引き続きご指導を宜しくお願い致します。

最後になりましたが、育志賞を受賞するにあたり支えてくれた家族にも、心から感謝します。自分が研究者になることを誰よりも望んでいた天国の祖父も、とても喜んでいると思います。多くの人々に支えて頂いていることを絶対に忘れず、今後も研究活動に邁進して参ります。

(しみず ゆうほ・東京大学)

2023年度若手研究者奨励賞 選考結果のお知らせ

すでに学会ホームページでも公表しておりますが、2023年度若手研究者奨励賞は、21件の応募があり、4名の選考委員による厳正な採点と審査の結果、以下の8名を受賞者として決定いたしました。受賞された先生方、おめでとうございます。

受賞者（五十音順 所属学年は応募時のもの）

汪 明琛 (おう めいちん)	なぜ戦いは絆を強めるのか？オキシトシンの役割	玉川大学大学院脳科学研究科 修士課程 1年
川口 周一郎 (かわぐち しゅういちろう)	効果的利他主義の心理的メカニズム：寄付効果の認識と共感に着目して	大阪公立大学 現代システム科学研究科 博士前期課程 1年
後藤 日奈子 (ごとう ひなこ)	社会的不確実性が向社会的行動の個人差に与える影響	専修大学大学院文学研究科 修士課程 2年
志水 勇之進 (しみず ゆうのしん)	感情解読の正確さと解読時の視線パターンの関連の検討	愛知淑徳大学大学院心理医療科学研究科 博士前期課程 2年
下川 詩乃 (しもかわ うな)	意見の表明に金銭的報酬がある状況において、意見分布はどのように変化するのか	関西学院大学社会学研究科 博士課程前期課程 1年
永延 佳那子 (ながのぶ かなこ)	「先んじて協力を示す」ことの有効性とためらいの日米差	大阪公立大学大学院文学研究科 博士前期課程 1年
三木 毬菜 (みき まりな)	遠い将来のことを考えると持続可能な選択をとれなくなる？：世代間協力割引仮説	関西学院大学社会学研究科 博士課程前期課程 1年
山下 美月 (やました みつき)	リーダーシップとフォロワーシップの切り替えを促進する心理的メカニズム	九州大学大学院人間環境学府行動システム専攻 修士課程 1年

選考委員は、以下の先生方です（五十音順）。

大江朋子先生（帝京大学）、相馬敏彦先生（広島大学）、宮本聡介先生（明治学院大学）、森津太子先生（放送大学）

今回応募された研究はいずれも大変興味深く、受賞された研究の評価と惜しくも受賞を逃した研究の多くの評価は僅差でした。その中でも受賞された研究は、テーマとしては「目的意識の明確さ」「独創性・個性」「社会心理学の研究としての『社会』への言及」、研究手法としては「仮説導出の根拠の明確さ」「斬新新規な視点・手法を取り入れた研究アイデア」「目的に沿った手法が、労を惜しむことなく選択されていること」、そして研究の遂行にあたっては「実現可能性」「社会への波及効果や実務への応用可能性」といった点が、他の研究より優れていると評価されていました。学会といたしましても、できるだけ多くの若手研究者を奨励していきたいと考えております。今回受賞に至らなかった方々には、次年度以降にまたぜひ挑戦していただきたいと思います。また、今回、応募に至らなかった若手研究者の皆様も、ぜひ奮って応募していただければと思います。

なお、2024年度も、9月30日（月）を締め切りとしてまもなく応募が開始される予定です。詳細は、学会ホームページをご参照ください。

若手研究者奨励賞・選考結果／募集要項：<https://www.socialpsychology.jp/award/wakate/>

（山下 玲子・研究支援担当常任理事）

新企画「認知科学・社心若手リーグ」報告

清水 佑輔

—「認知科学と社会心理学の若手で、何かできませんかね」—そんな軽い雑談から、認知科学若手の会と社会心理学院生リーグのコラボレーションが始まりました。

そもそも、院生リーグについてご存じでない方もいらっしゃると思います。これは例年、本学会大会(9月頃)の前後で開催されている、学生による学生のための「プレ学会」です。院生リーグでは、あえて参加者を学生(学部生や大学院生)に限定することで、ざっくばらんかつ気楽な議論ができる場を確保しています。また、学生が減少している中で、同世代の仲間と知り合う貴重な機会になっているはずです。

2023年度の本学会大会の終了後、認知科学若手の会の代表である東京大学の塚村祐希君(ちなみに彼は私の学部時代の後輩です)からお誘い頂き、共同で研究会を開催する運びとなりました。個人的には、院生リーグの良い意味で緩い空気を残しつつ、異分野との協働ができれば面白くなるだろうと思いました。よって、「発表内容は学会で発表済みでも、研究計画段階でも、思い付きでも、何でも良い」という院生リーグの伝統を継承し、それを受け入れて頂いた認知科学サイドのメンバーには本当に感謝しています。



当初、認知科学と社会心理学という2つの領域の「微妙な」距離により、発表内容が噛み合わず、分野内の人とその分野の人にコメントするだけになってしまうのではないかという懸念がありました。しかし、その懸念は杞憂に終わりました。本研究会のエントリー時に専門分野を尋ねた結果、認知科学と社会心理学はほぼ半々であり、両方に当てはまると回答した参加者も相当数いました。私が思うよりも、この2つの領域は重なりがあるようですね。参考に、認知科学を専門とすると回答した参加者の発表タイトルをいくつか掲載いたします。例えば「熟達者は曖昧な俳句に興味を見出す」「AI生成製品における創造性評価バイアス」「情報過多が脳機能低下を引き起こすメカニズムの検討」といったものです。なんだか、社会心理学でも少し扱えそうな、ちょっとならコメントできそうな「絶妙な」距離のテーマな気がしませんか。

本研究会は前例のない試みであったため、運営がうまくいくか、参加者が集まるのかなど、不安だらけでしたが、認知科学若手の会、社会心理学院生リーグ双方の有志による協力のもと、無事に開催できたことを感謝申し上げます。蓋を開けてみれば、学会大会とは独立した開催であったにもかかわらず、70名程度が参加し、懇親会には40名程度(2次会には17名、3次会には9名!!)が参加しました。遠方から自費で参加して頂いた方も多く、今後はハイブリッド開催といった展開も必要かもしれません。しかし、自分も含め多くの学生は、学部・修士時代にコロナ禍の被害をまろに受けた世代であり、やはり対面での議論に勝るものはない気がします。

ここまで、本研究会について(偉そうに)述べて参りましたが、実は自分(だけでなく認知科学サイドの塚村君も)は発表を行わず運営に回っていました。その分いっぱい質疑に参加しようと思い、空き時間は極力質疑に参加していましたが、やや的外れな質問もしてしまったように思います。しかし、どんな内容の質疑でも気楽にアタックできる雰囲気の方が良いと思っています。

るので、ぜひ後輩も後に続いて欲しいと思っています。「え、そんな質問するの??」といった冷めた空気や、発表内容に対する無慈悲な攻撃は、院生リーグに(というか学会大会にも)存在すべきではないですよ。

余談ですが、モデリングを愛して止まない某院生が、私との共同研究の内容を発表してくれました。自分は序論と考察、彼は方法と結果を主に担当し、現在論文を執筆中です。このような、院生だけによる「分業」の姿を、曲がりなりにもお見せできたことは、非常に良かったと思います。本稿を読まれている学生の皆さんもぜひ、熱意と勢いで面白い研究をやっていきましょう。互いをリスペクトし、得意な部分を活かして、共働できたら良いですね。

最後になりましたが、院生リーグの運営は有志で行われています。所属大学・学年にかかわらず、運営に関心がある方は、ぜひお声がけください。そして、コラボしたい団体の皆様、もしいらっしゃればぜひご連絡ください!!

(しみず ゆうほ・東京大学)

『社会心理学研究』掲載(予定)論文

第40巻第1号(2024年7月刊行予定)

【原著論文】

日下部春野・前田友吾・結城雅樹 拒否回避傾向の文化差はどこからくるのか：関係流動性と評判期待の役割

【資料論文】

隅田莉央・小宮あすか 選択式問題における選択肢の数と後悔との関連

小林哲郎・三浦麻子 リスト実験を用いたセンシティブティバイアスの検出における直接質問形式の影響

藁田みな美・横田晋大・中西大輔 2種類の集団課題を用いた「二八の法則」の実証研究

眞嶋良全 日本語版陰謀論的心性質問票の開発と妥当性の検討

【書評】

谷口尚子 「Contemporary Japanese Politics and Anxiety Over Governance」(2022, Routledge) Ikeda, K. (池田謙一) (著)

石井辰典 「数値シミュレーションで読み解く統計のしくみ：Rでためしてわかる心理統計」(2023年, 技術評論社) 小杉考

司・紀ノ定保礼・清水裕士 (著)

柴内康文 「[完全版] 大恐慌の子どもたち—社会変動とライフコース」(2023年, 明石書店) グレン・H・エルダー・Jr.

(著) 川浦康至 (監訳)

編集後記

65回大会が近づいてまいりました。岡先生のお原稿やお写真を拝見して、学会が一層楽しみになってまいりました。

今年の5月にはサンフランシスコで開催されたAPSに参加してきました。社会心理学のプログラム委員を仰せつかったこともありなかなかハードでしたが、特に1人5分のflash talkセッションでは社会心理学の若手研究者のリサーチ・クエスチョンや新しい方法論などを知ることができ、また、発表者間の横のつながりも構築することができました。すべてがオンラインだったころを思うと、集まって話ができる、立ち話から新たなアイデアを得る、そんなことの重要性を再認識します。大坊郁夫先生が受賞のお言葉の中で「研究者にとって、学会活動は不可欠な相互鍛錬の場だと考えています。研究成果を仲間と共有し、批判し合い、新たな示唆を受けられるからです」と書かれておられます。まさに学会のつながりを通して、新たな示唆や活力を得る、そのような会になるように私も参加者として努力したいと思いました。皆様に65回大会でお会いできるのを楽しみにしています!

(内田 由紀子・広報担当常任理事)